

## IATSSにおける交通安全研究のあゆみ

中村昭壽\*

### The Activities of IATSS Traffic Safety Research

Akihisa NAKAMURA\*

国際交通安全学会 (IATSS) が26名の会員で設立された翌年の昭和50年に、18名の多分野のメンバーからなる「大型スクランブル交差点 (数寄屋橋) の研究」プロジェクトが発足した。このプロジェクトは当学会が掲げる理念にもとづく「学際研究」の確立をめざしたものであった。一方では当時の深刻な社会問題を直視した「暴走族と青少年問題の研究」プロジェクトが、その活動の一翼を担ってスタートしていた。これらの研究プロジェクトは、発足間もないIATSSの社会認知に向けての自主研究活動であった。

発足から4年後の昭和53年に、最初の受託研究となった「自動車の安全運転に必要な高度な技能・知識に関する研修の研究」を自動車安全運転センターから委託された。この研究は、平成3年に開所した「安全運転中央研修所」の研修ソフトウェアおよび教育カリキュラムの開発を支えたもので、その後平成2年に至るまで個別テーマに絞ったプロジェクトが設けられ、IATSSの研究活動の中心的テーマの一つとなった。当学会の成長発展と共に、昭和55年には建設省より「高速道路の自動車走行経費の調査研究」を、昭和56年には警察庁より「免許更新時の講習の評価」、総務省より「青少年ドライバーに関する調査研究」テーマを、昭和60年には運輸省より「職業運転者による歩行者・自転車事故の分析」研究を受託でき、交通行政をつかさどる諸官庁の認知を得るに到ったことは、その後の研究活動の発展に大きな影響を与えたといえる。

国内の交通が抱える諸問題を直視して始まった諸研究活動は、第二次5ヵ年計画に入った昭和55年、

その目を国際社会に広げた。「ドライバーの意識と行動・国際比較—9ヵ国共同研究」に始まり、「東南アジア各国に固有な交通手段の利用実態調査」、「LRT導入 (マニラ市) の事前評価—社会・文化的影響調査」へとつづき、昭和62年には、当学会英文機関誌 IATSS RESEARCH の誌面を一新し、海外からの投稿論文を掲載できるようになった。

学際性・国際性・先見性・実働性の4つの理念を掲げて進められた研究活動の結果、総合的政策提言の機会が得られた。これは交通安全研究活動の最終目標として掲げた「テクノロジーと人間の幸福な調和をはかる」ことに、直接参加する機会を得たといえよう。最初の総合提言となった「第4次交通安全施設等整備事業5箇年計画策定に際しての提言」が昭和60年に警察庁、建設省へ提出された。

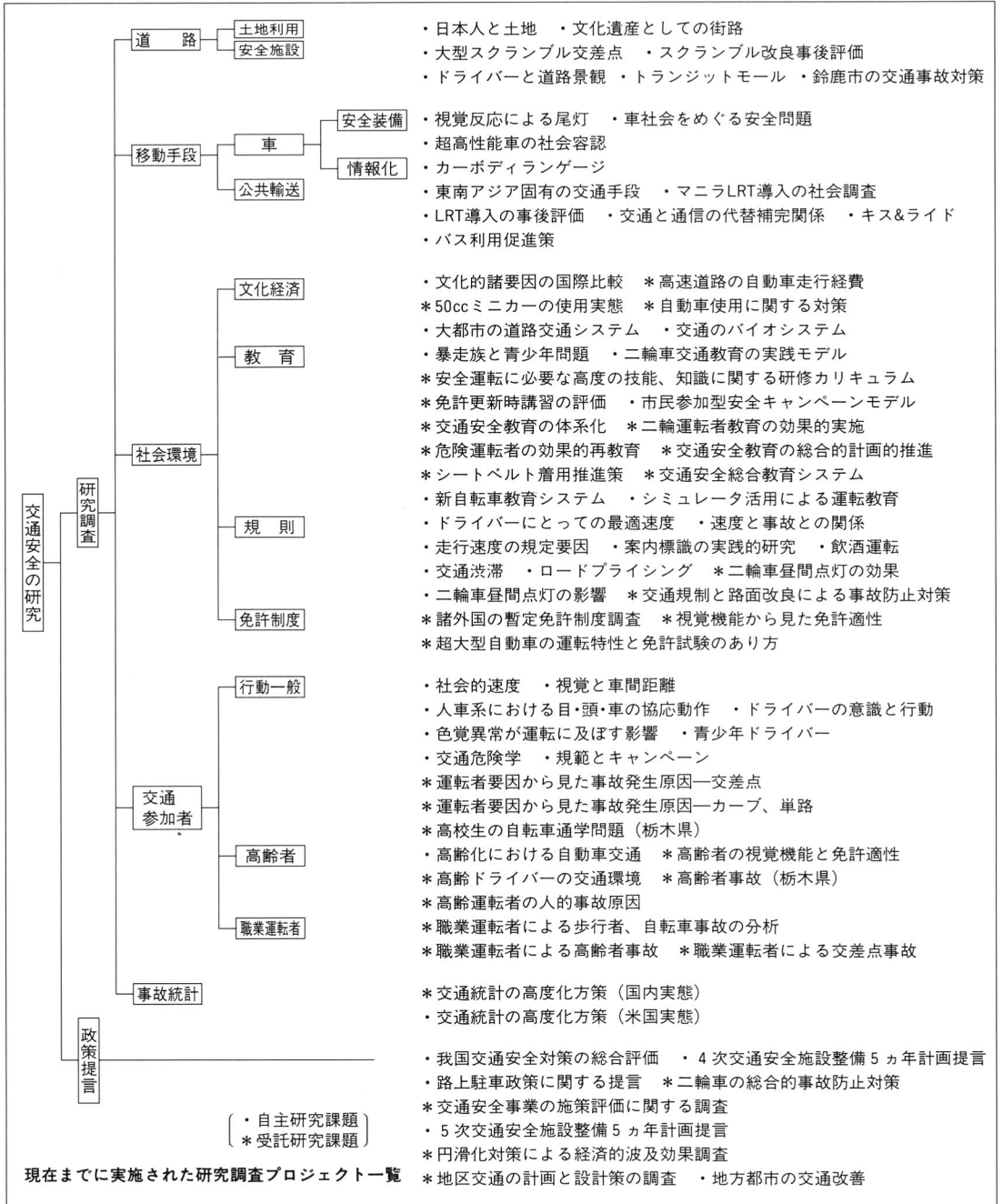
この提言により「円滑か安全か」の二者択一の考え方から、「安全も円滑も」と「調和」を求めた交通政策への転換が促されることになった。

続いて平成1年5月、IATSS研究活動15年の集大成として、「第5次交通安全施設等整備事業5箇年計画策定に際しての提言」が警察庁、建設省へ提出された。時代は交通事故死者数が1万人を再び突破し、さらに増加の途をたどり第二次交通戦争と呼ばれる中で、各方面の一層の努力が求められていた。越正毅提言委員会委員長はその日本の状況を「解剖無き医学」にたとえ、さらに現状の科学的解析と効果的費用配分を訴えた。

IATSSが発足以来手掛けた主な研究課題を一つの形に整理してみたものを付表に示す。

その時々で最も必要とされた諸研究課題は、17年の年月の積み重ねで、各項目を余すところなく埋め尽くしている。このことは一つに、交通安全の研究がいかに多方面の識見を必要としているかを実証しているといえよう。そしてこれだけの研究課題をこ

\* (勸) 国際交通安全学会研究調査部長  
Director, Research Division,  
International Association of Traffic and Safety Sciences  
原稿受理 1991年9月24日



なした現時点でも、未だ解析不足であると言わざるを得ない深遠性をも示唆している。専門研究と学際研究の、コンビネーションと調和がさらに求められるところであろう。

変わりゆく環境のもとで、IATSSがこれまで手掛けた諸課題を新しい目で追求することを、時代は問いかけてきている。限られた人的・物的資源のもと

で、この広いニーズに深く応えていくために、今迄以上に先見性をもってテーマの選択を行っていく必要があることは言うまでもなく、より普遍的な事実把握に一層の努力が必要であろう。

諸先生方の永年のご努力に感謝すると共に、今後の一層のご指導をお願いする次第である。